

ペラギウスの義認論

鈴木 浩

前書き

一九九七年に山田望氏による『キリストの模範』という著作が出版された。これは、副題に「ペラギウス神学における神の義とパイディア」とあるように、日本で初めて本格的にペラギウスの神学を扱った論文である。本書によって、これまでアウグスティヌスの著作を通してしか知ることができなかったと言っても過言でなかったペラギウスの神学が、ペラギウス自身の著作を通して検証可能となった。その意味でこの著作は画期的な著作だと言えるであろう。小論もこの著作に依拠している。

一、いわゆるペラギウス主義とは何か

ペラギウス主義は西方教会の伝統の中では、異端の中の異端、最悪の異端と見られてきた。ルターは一五一

七年に書いた『スコラ神学反駁』を次のようなテーゼで始めている。

一、異端者に反対してアウグスティヌスが語っているとき、彼には誇張があると主張することは、アウグスティヌスがほとんどどこでも嘘をついていると語ることと同じである。(わたしのこの見解は一般の認識とは違っている。

二、それは、ペラギウス主義をはじめ、すべての異端が勝ち誇るのを容認するのと同じことであり、事実、彼らに勝利を譲ることである。

このように、ルターは宗教改革の発端となった『九十五箇条の提題』に先立って書かれたこの著作で、ペラギウス主義を攻撃し、「急進的アウグスティヌス主義者」としての自らの立場を鮮明にした。ルターは、ペラギウス主義に反対して語っているアウグスティヌスの言葉は、文字通りに受けとめねばならない、と主張しているのである。

他方、メランヒトンは宗教改革運動の綱領文書とも言つべき『アウグスブルク信仰告白』の第二項「原罪について」で、「原罪は罪ではなく、したがって自分たちは自分たちの力によってその本性を神に喜ばれるものとなしうると主張し、キリストの受苦と功績をあなごるペラギウス派とその他の者たちを斥ける」と記して、ペラギウス主義者を名指して非難する。『神学総覧』でも「原罪」から記述を始めているメランヒトンは、『アウグスブルク信仰告白』でも、「神の子」に関する条項(第三項)に先立って原罪を取り上げているが、ペラギウス論争の究極的焦点は、原罪の有無をめぐるものであった。他の改革者たちもペラギウス主義を断罪すること

では、ルターやメランヒトンに引けを取らなかった。「信仰義認論」によって神学上の統一戦線を張った宗教改革者たちにとって、それに対立した「行為義認論」の出所と見られたペラギウス主義者は、したがって、最大の敵だったのである。

ペラギウス主義は、アウグスティヌスの拠点だったアフリカのカルタゴ司教会議で繰り返し断罪されたが、(おそらくはペラギウス論争の本質をついに理解できなかった東方教会をも巻き込んで)四三二年の第三回公会議(エフェソ)で、公式の異端宣告を受けた。ルターは、カトリック教会公認のアウグスティヌス主義は、「アウグスティヌスの仮面をかぶった隠れペラギウス主義」であると見ていたので、宗教改革の教理論争は、「ペラギウス論争の再燃」という側面を持っていた。

この小論の意図は、アウグスティヌス以来、一貫して行為義認論の主唱者だったと考えられ、宗教改革の標的にもなったペラギウス主義の義認論を、日本でおそらくは初めてペラギウスの神学を本格的に論じた山田望氏の『キリストの模範』(教文館)を手掛かりにしながら、分析することである。

二、ペラギウスのプロフィール

生まれはブリタニア、生年は三五年頃と考えられる。三八一年から八四年の間にローマに来て、修道生活の指導者することになった。修道僧だったとされることもあるが、修道院制度が西方に本格的に定着する以前の時代なので、厳密な意味で修道僧であったわけではなく、修道生活に憧れを抱いていたローマの上流階級の中であって、その霊的指導を行っていたと思われる。ペラギウスはローマで修道生活の指導者としてすでに名

声を確立していた。他人からの伝聞に基づいているが、アウグスティヌスはペラギウスについて、「彼は聖者であつて、宗教的に少なからず向上したキリスト者」であると指摘している（『罪の報いと赦し』三・一・一）。アウグスティヌスとペラギウスとは、四一年にローマが（アリウス派西ゴート族の王）アラリックの軍に侵略され、略奪を受けたときに、ペラギウスが難を逃れてアフリカのカルタゴに行き、そこでアウグスティヌスとの接点ができたことから公然とした論争に踏み込んでいく。ペラギウスは、この時には法律家で弟子のカエラスティウスを伴っていた。

ペラギウス主義者として知られているのは、名前の起源となつたペラギウス、弟子のカエラスティウス、エクラヌムのユリアヌスなどである。アウグスティヌスが晩年に至るまで論争を続けたのは、アウグスティヌス自身が「ペラギウス主義の建設者」と呼んだこのユリアヌスであつた。

ペラギウスの著作として確認されているのは、（断片しか残されていない）『自然について』と『自由意志論』があり、『クラウディアへの手紙』『ケランティアへの手紙』など、女性の弟子宛の手紙も残っているが、主著はパウロの手紙に注解を加えた『パウロ書簡注解』である。

三、ペラギウス論争の始まり

アウグスティヌスとペラギウスの論争がどのようにして始まつたかは、アウグスティヌス自身の著作から明らかになる。西方教会ですでに大きな影響力を行使し始めていたアウグスティヌスの著作は、ペラギウスの目にも留まつていた。ローマで修道生活の指導をしていたペラギウスは、アウグスティヌスの著作『告白』の中

にある祈りに衝撃を受けた。アウグスティヌス自身が記しているところを見ることにする。

しかしわたしが著した著作のうちで、わたしの『告白』ほど遍く知られ、また喜んで読まれているものがあるうか。わたしはこの書物をも、ペラギウス派の異端が現れる以前に公にしたのであるが、そのうちで確かにわたしは次のように神に向かって語り、しかもしばしば語った。つまり「あなたの命じるものを与え、あなたの欲するものを命じたまえ」と。ローマにいたペラギウスは、わたしの同僚の司教であつた兄弟によつて、これらの言葉が彼の同席した場で語られたとき、彼はこれに我慢できず、かなり激昂してこれに反論し、これを語つた人とほとんど喧嘩になるほどであつた。(『堅忍の賜物』二・五三)

「ストア的道德主義者ペラギウスは何かを求めて乞い求める祈りなどは行わない。祈るのは神に感謝するため、しかも助力を求めてではなく、自由意志の力によつて実現された行為に対する感謝のためである」。(金子晴勇訳『アウグスティヌス著作集』九巻「ペラギウス派駁論集二」三三六頁)

アウグスティヌスの祈りは、人間に倫理的主体性をまつたく認めていないようにペラギウスには思われたのである。彼の目から見れば、アウグスティヌスは「倫理的敗北主義者」でしかなかつた。ローマの上流社会で貴婦人たちの倫理的向上に全力を傾倒していたペラギウスが、高名なアウグスティヌスのそのような思想に「我慢できず……激昂してこれに反論し」たことは、ペラギウスにしてみればそれ相当の理由があつたのである。

四、ペラギウスの義認論

信仰のみによる義認

宗教改革者たちが一致して強調した「信仰義認論」は「行為義認論」に対して、「信仰による」義認を特徴とする義認論である。その際、行為あるいは功績という要素がいささかでも入り込む余地がないように、しばしば「信仰のみによる」義認という具合に、「のみ」が強調される。宗教改革の神学の特徴は、この「のみ」にある。いわゆる「聖書のみ」「信仰のみ」「キリストのみ」という強調がそれである。この「のみ」の神学は、「聖書と伝統」「信仰と行為」という当時のカトリック教会の「との神学」の教理的特徴と顕著な対照を示している。義認論の出所であるパウロにおいては、(ユダヤ人もギリシャ人もなく、男も女もなく、奴隷も自由人もなかった)「キリストに対する信仰」と、(割礼を受け、食物規定などの祭儀規定を守ることによってユダヤ人になることを条件とした)「ユダヤ的律法主義」という両極で形成されていた対立軸が、ここでは「キリストに対する信仰」という極は不変のまま、「ユダヤ的律法主義」が、「善行や功績」に置き換わった形で成り立っている対立軸に変わっている。

ところで、山田氏が繰り返し指摘するように、ペラギウスはその著作の中で繰り返し、信仰のみによる義認という言葉を使っている。山田氏の『キリストの模範』から引用する。(強調は鈴木による)。

彼らは、神が信仰のみによつて義としてくださることを知らず、守ることを知らなかつた律法の業によつて自分たちを義しい者であると思はれ、罪人であつたと思われないうちに、自らを罪の赦しに服させよ

うと望まなかった。(『ローマ書注解』一・三)

信仰のみが異邦人を救うのでなければ、私たちも救われません。(『ガラテヤ書注解』二・一七)

もし私に恵みのみで十分でないとするれば、恵みは投げ捨てられるのです。もし律法が義とすることができたなら、キリストは無駄に死んだこととなります。(『ガラテヤ書注解』二・二二)

誰も律法を守ることができないので、それゆえ、信ずる者は信仰のみによって義とされるべきであると思われたのです。(『ガラテヤ書注解』三・一一)

律法は、信仰のみによって義とすることはありません。彼らは永遠に生きようと、その労苦によって義を探し求めていました。(『ガラテヤ書注解』三・一二)

聖書がすべての人を罪の支配下に閉じこめたのは、まさしく信仰のみによって、信ずるすべての人が救われる必要があつたためです。(『ガラテヤ書注解』三・二二)

あなた方がキリストを信じたその信仰のみによって、ユダヤ人も異邦人も同等なのです。(『ガラテヤ書注解』三・二六)

彼らはずまずきになります。なぜなら私は、信仰のみにおいて十字架の救いがあるのだと言っているからです。(『ガラテヤ書注解』五・一一)

もしあなた方が、まさしく義しい者たちによって受け入れられるあの聖霊を、信仰のみによって受け取ったのであれば、律法の重荷や業なしに、あなた方が義しい者であることは確実です。(『ガラテヤ書注解』三・五)

以前の生活の功績によってではなく、信仰のみによってあなたがたは救われました。しかし、信仰なしにはありません。(『エフェソ書注解』二・八)

(この世の予定によって)人が他の方法によって救われるのではなく、キリストへの信仰のみによって、いつ救われるかをあらかじめお決めになったのです。(『エフェソ書注解』三・一一)

ペラギウスが、ペン先が滑って「信仰のみにによる義認」と書いてしまったのではなく、自覚的に「信仰のみにによる義認」を説いているのは、これだけの引用があれば十分に明らかであろう。ペラギウスは「信仰のみにによる義認」の神学者なのである。「ペラギウスによれば、キリストは『人間的なもの』として人間を拘束していた律法を廃棄し、いかなる律法の業、人間の功績によらずとも無条件に、ただ信仰のみによって不敬虔な者の罪を赦し、義と認めると共に聖霊の恵みを注いだのである。この点に関する限り、ペラギウスが、パウロの根

本主張（信仰による義）を正しく受け継いでいることはいささかも疑い得ない」（『キリストの模範』一四六頁、括弧内の説明は鈴木による）。

しかし、「信仰のみによる義認」という言葉をどれだけ繰り返しても、そのこと自体が、「パウロの根本主張を正しく受け継いでいる」ことの保証にはならない。真の問題は、「信仰のみによる義認」という表現が具体的に意図している「内実」、その「中身」だからである。

ペラギウスによる義認理解の内実

言葉遣いの上で見ると、ペラギウスが確かに「信仰のみによる義認」の神学者であることは、認めねばならない。ここで「信仰のみによる義認」というフレーズを考えると、当然のことであるが、それが「信仰のみによる」と「義認」という二項目からできあがっていることが分かる。「信仰のみ」とは、「信仰以外のもの」をいっさい必要とせずに」という意味以外ではありえない。律法も、業も、功績も排除され、何であれ他のいっさいが排除されている。「のみ」とはそういうことだからである。

他方、「義認」(ペラギウスの言葉では *iustificatio*) は、そのラテン語にはかつて「宣義」(義と宣言する)、「義認」(義と認める)、「義化」(義とされる)、「成義」(義となす) など、様々な訳語が与えられていたように、「信仰のみによる」という言葉とは違って、「義的ではない。つまり、「義認」という表現がどのような内実を指して使われているのかを検証しなければ、「ペラギウスが、パウロの根本主張を正しく受け継いでいる」かどうかは、「いささかも」明らかではないのである。同じ *iustificatio* という言葉を使っていながら、等しく「義認論の神学者」であったアウグスティヌス、ルター、カルヴァンの間でも（つまり、同じ思想系列に立つ神学者の間

でも) justification」といふ言葉が持つ意味合いには微妙な違いがあったからである。

「いわゆる」初めの義認

「ペラギウスは……信仰のみによる義を……信仰に入って間もない初心者に妥当するいわゆる『初めの義認』として位置づける」(『キリストの模範』一四七頁)。この点についてペラギウスは次のように語っている。「心を入れかえつつある不敬虔な者を信仰のみによって神は義とするのであって、良い行いによってではありません。善行などまだ行っていなかったからです。そうでなければ、その人は不敬虔な行いによって罰せられねばなりませんでした。同時に、信仰によって義とされるのは、少し前に信じ始めたばかりの不敬虔な者であると主張したことに注意しなければなりません」(『ローマ書注解』四・五)。つまり、「受洗の際に授けられる信仰のみによる義認とは、過去に犯した罪が、いまだその罪の克服のためにいかなる功績を為していなくとも、その罪からの解放を願って悔い改め、キリストに従おうとする新たな決断を下すだけで赦されることを意味する」(『キリストの模範』一四七頁以下)ことになる。

ここではつきりしていることは、ペラギウスが言うところの「義認」とは、信仰者としての生き方の「入り口」の問題であるということである。「信仰による義認」が適用されるのは、「心を入れかえつつある不敬虔な者」(少し前に信じ始めたばかりの不敬虔な者)である。つまり、キリストの福音を聞き、キリストを信じるようになった人は、キリストを信じるというただその一点によって、キリストを信じる前に犯し、積み重ねてきた罪の赦しを得る、ということである。そして、無代価で(つまり、何の善行もなく、何の功績がなくても)信仰のみによって受け取るその義認は、具体的には「信じて洗礼を受ける」ときに与えられるのである。つまり、

キリストを信じるようになる前に犯し積み重ねてきた罪業（言い換えれば、負債）が、信仰のみによって洗礼を受けることにより帳消しにされる（言い換えれば、御破算になる）、ということである。比喩的に言えば、ペラギウスが意図しているのは、霊的「徳政令」、つまり、「借金の棒引き」である。

これによって、信仰のみによって義とされた「信じ始めたばかりの人」は、「不良債権を処理して、借金ゼロの状態」から信仰者としての生活を始めることができるのである。その際に必要なのは、「信仰のみである」というのが、ペラギウスが言うところの「信仰のみによる義認」の内実である。

さらに言い換えれば、「少し前に信じ始めたばかりの不敬虔な者は」、不勉強の必然的な結果である「不可だらけの内申書」を破棄されて、無試験で、しかも正式に、神の大学に入学が許される、ということである。だから、ペラギウスのいう「信仰のみによる義認」とは、信仰生活の「入り口」の議論であり、もう少し突っ込んで言えば、「入り口」の議論ではないのである。

義の模範としてのキリスト

だから、「無試験、無条件での入学」という戯画を使えば、重要なのは「入学後の勉強」であり、「目標達成後の卒業」ということになる。山田氏によれば、ペラギウスの神学の基軸をなしているのは、ギリシャ哲学からギリシャ神学者に受け継がれ、キリスト教的な変容を遂げた「神的パイディア（教育）」という概念である。その点はまず間違いない。「ペラギウスは、ギリシャ教父同様に、このパイディアという基本的骨組みを継承し、この骨組みに従って自らの神学を展開させている」（『キリストの模範』七頁）だけでなく、「より具体的に、神的パイディアの力動的な働きを表現するために、模範と模倣という概念を他の教父以上に多用する」（同

書七一頁)。だから、「信仰のみによる義認」を「無試験、無条件の入学」にたとえた比喩は、それほど不適切ではないことになる。

そこで、「信仰のみによる義認をペラギウスは、信じ始めて間もない不敬虔な者に妥当するとみなし、受洗後はキリストにならって隣人愛の実践をするよう強く勧告する」(同書一五七頁)。ペラギウスにとつて真に重要なのは、「受洗後」のことなのである。ここで機能するのは、「模範としてのキリスト」であり、義とされた信仰者がその模範を模倣することである。「模倣」という概念はペラギウスの神学のキーワードである。人間が罪を犯すのは、「アダムを模倣する」からであり、人間が(究極的に)救われるのは、「キリストを模倣する」からである。「アンプロシアステルは、(しかし、アンプロシアステルだけでなく、その後のアンプロシウスもアウグスティヌスも)、ペラギウスのように、人はアダムを模倣することによって罪を犯す」と語るつとしない。同様に、アダムの罪を模倣することによって墮落した人間が、キリストの模範によって救われる、とも主張しない」(『キリストの模範』一五三頁、括弧内は鈴木による)。アダムの罪を模倣することによって墮落した人間(永遠の断罪に値する負債を負った人間)は、信仰のみによって洗礼を受けることにより義とされ(負債ゼロの出發を許され)、義の模範であるキリストを模倣することによって救われる、というのがペラギウスの主張なのである。

無論、そのような主張が行われる前提は、それが事実として可能であると考えられることである。「キリストの模範は……罪と死を克服しうる可能性を示し、その希望を人間に授ける模範である」(同書一五一頁)。ここでは、義認の領域で機能していた「贖い主」としてのキリストは、「ロールモデル」としてのキリストに転化している。ペラギウスの理解では、「信仰のみによって義とされた」人間は、墮落以前のアダムと同じ状態に立ち

帰る。だから、再びアダムを模倣しないためには、模倣すべき模範としてのキリストがいつそう重要になる。

イエスと弟子たちとの関係が「教師と弟子」というイメージで福音書に記されていたり、中世末期のベストセラー『イミタティオ・クリスティ』に典型的に示されているように、「教師あるいは模範としてのキリスト」という概念は、最初からキリスト教信仰に内在していた。しかし、それは常に、「贖い主キリスト」という概念の背後に隠れて、それを圧倒するようなことはない。聖霊論がキリスト論の「背面の思惟」（北森嘉蔵）であるように、「模範としてのキリスト」という概念も、「背面の思惟」に留まる必然性を持っている。

ペラギウスの場合には、その「背面の思惟」が「前面」に出て来ている。しかも、それはただに「前面に」というのみならず、「全面に」出て来るのである。聖霊論がキリスト論を突破して前面に出て来ると、しばしば、カリスマ的逸脱が生じるように、「模範としてのキリスト」という表象が「贖い主キリスト」という表象を突破して、それを凌駕するようになる。しばしば、倫理主義的逸脱が生じることになる。

ペラギウスの場合、「信仰のみによる義認」は、「信じ始めて間もない不敬虔な者」にしか妥当しない。信仰によって義とされた者は、一刻も早くそこを後にして、「模範としてのキリスト」を模倣しなければならない。だから、義認は「過去」のこととならねばならないのである。こうして義認の概念が見事に平板化され、義認論も考えうる最小限の射程しか持たなくなる。「ペラギウスが、パウロの根本主張（信仰による義）を正しく受け継いでいることはいささかも疑い得ない」（『キリストの模範』一四六頁、括弧内は鈴木による）どころか、根本的なところで重大な思い違いをしている嫌疑が極めて濃厚なのである。

五、義認理解の平板化の並行現象としての洗礼理解の平板化

終末意識の後退と同期して、「この世界に神の世界が激しく突入してくる終末的出来事としての洗礼」の意義が著しく後退したのが、コンスタンティヌス以後のキリスト教の顕著な特徴の一つであった。洗礼の意義は儀式としての洗礼式に封じ込められ、多くの場合、「過去の罪の帳消し」「過去の罪の汚れの洗い流し」と受け取られるようになった。(こうした傾向の延長線上に、初代教会では神学的にも実践的にも根本的には未解決のままに先送りされていた)「洗礼後の罪の問題」を解決する手段として、「第二の洗礼」としての機能を強めていく「ざんげのサクラメント」が成立していく。

ペラギウスの洗礼理解は、初代教会に見られるそうした一般的傾向を考慮しても、なお平板である。洗礼は「信仰のみの義認」が現実を引き起こされる出来事である。その義認は、しかし、究極的な救いのためには「過去のこと」として後にし、「模範としてのキリストへの模倣」において前進しなければならぬ。その義認が成立する場であった洗礼も、当然、過去の出来事、戯画化して言えば「すでに終わった無試験の入試」である。

ペラギウスは嬰兒洗礼を拒否しない。それは、無惨なほどの一貫性の欠如である。ペラギウスから見れば、「アダムを模倣する」能力を持っていない嬰兒は、「洗礼によって洗い流すべき過去の罪」を持たない。だから、嬰兒洗礼は「罪の赦しのための唯一の洗礼」(ニカイア・コンスタンティノポリス信条)という洗礼の定義には該当しない。「洗礼についてペラギウスは、幼児洗礼を無碍に否定はしなかったが、もっぱら成人洗礼を念頭に置く」(『キリストの模範』一四七頁)。「無碍に否定はしなかった」という言い方は、意味深長である。(論理的一貫性からすれば)本^本当^当は否定しなかったのだが、否^否定^定で^でき^きな^なか^かつ^つたのである。嬰兒洗礼が、誰も否定できない

ほどに東西の教会で定着した慣行になっていたからである。この時代から一世紀半も前にすでにオリゲナスは「嬰兒洗礼を「使徒的慣行」と呼んでいた。

だから、ペラギウス主義は「罪の赦しのための成人洗礼」と「罪の赦しではなく、天国への入国許可としての嬰兒洗礼」という二種類の説明をするよう追い込まれていくことになった。ここでの論理的破綻は明らかである。それに対して、アウグスティヌスは、「教会が嬰兒にも洗礼を施す慣行を持っているのは、嬰兒にも洗礼で洗い流されねばならない罪、すなわち、アダムから受け継がれた原罪があるからだ」と指摘して、「罪の赦しの洗礼」という説明で一貫させることができたことから、原罪論が西方で広く受け入れられるようになり、また、それまで説明が難しかった「嬰兒洗礼が初めて神学的正当化を得ることになったのである。

終わりに

言葉遣いの上ではペラギウスは「信仰のみによる義認」の神学者である。しかし、それは極めて平板化された義認理解と組み合わせられていた。本当に大切なのは、義認以後の「キリストへの模倣」(イミタティオ・クリスティ)である。そこでは、神の恵みと人間の「共働」がキーワードとなる。それだけでなく、「信じる」という人間の行為そのものも、神からの恵みの働きと、人間の信じようとする働きとの共働によって成立する(『キリストの模範』一四八頁)。だから、「信仰のみによって」成立する義認という入り口から究極的な救いまで、この「共働」は一貫して機能するキーワードである。パウロを、アウグスティヌスを、ルターを、圧倒的な力で脅かした罪は、「アダムの模倣」でしかなくなり、この「共働」によって事実として克服可能な事態となる。

ラインホルド・ニーバーがペラギウス主義者を「単純な道德主義者」と呼んだのは、正確な評価だったのである。

(なお、小論で引用したアウグスティヌスの文章は、『アウグスティヌス著作集(教文館)からの引用であり、ペラギウスの『パウロ書簡注解』からの文章は、『キリストの模範』から引用させていただいた)。